

人間イエスの宣教活動に見られる福祉実践 (1)

－誕生・洗礼・宣教－

大澤 史 伸 (東北学院大学 教養学部)

1. はじめに

本論文の目的は、聖書における人間イエスに見られる福祉実践と思われる活動について取り上げ、それが現在の私たちに対してどのようなメッセージとなっているのかについて考察をすることにある。福祉研究者によるイエス・キリストと社会福祉に関する研究としては、最近では、新約聖書マルコ福音書のイエスの癒しの思想について取り上げたものや(島田、2013年)、旧約聖書時代の女性の地位とイエスの女性への関わりについても(春名、2008年)等がある。

しかし、先行研究の多くが、主にイエスの福祉実践というものを病人等に対する癒しに限定する傾向が見られること、そして、これは本論文のタイトルにもあるように、「人間イエス」としての福祉実践ではなく、「人間イエス」が十字架にかかり死んだ後に彼の弟子たちが「人間イエス」の死の向こうに、「神の御子」としての姿を見た信仰に基づく「イエス・キリスト」の医療的癒しである場合が多いといえる(金、1992年)。

したがって、本論文の目指すべき点としては、弟子たちの信仰する「イエス・キリスト」ではなく、あくまでも「人間イエス」がどのような福祉実践を行ったのかということを中心に見ていくことにする。また、「人間イエス」の福祉実践を医療的癒しだけに限らず、幅広く「人間イエス」の誕生から十字架の死に至るまでを通して見ていくことにする。

そのためには、「人間イエス」が登場するマタイによる福音書、マルコによる福音書、ルカによる福音書、ヨハネによる福音書(以下、四福音書と記述する)を資料として、「人間イエス」の行った福祉活動の実像に迫りたいと考えている。いうまでもなく、著者はキリスト教を専門とする研究者ではなく、あくまでも福祉研究者であるので、必要以上に神学的な問題については触れることをせず、「人間イエス」に関するいくつかの見解を取り上げるにとどめることにする。

そして、当時のイスラエルの時代の中で「人間イエス」の行った福祉実践と考えられる行為が社会に対してどのような影響を与えたのか、そして、その時から数千年経った現在において、そのことはどのような意味を持っているのかについて考察をする。また、本論文は、「人間イエス」の誕生・洗礼・宣教と大きく3つに分けて、彼の生涯を見ていくことにする。

2. 研究方法

聖書の解釈には様々な立場があり、それらを大きく3つに分けるとするならば、①信仰的解釈、②合理的解釈、③歴史的解釈とすることができる(赤司、1966年)。①信仰的解釈の最も極端なものは、聖書は神の言葉であるから、その記述には全く誤りがなく、聖書の記述そのものを疑うことなく受け入れる立場である。また、②合理的解釈とは、信仰的解釈とは反対に、聖書のあらゆる記述に対して合理的観点から説明し、理解をするという立場である。

例えば、新約聖書マタイによる福音書14章25節には、「夜が明けるころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。」(新共同訳聖書)という記述を見ることができる。これに対して、先ほど説明をした①信仰的解釈では、この出来事をそのまま受け入れることになる。一方で、②合理的解釈では、イエスがガリラヤ湖畔の丘を歩いていたのを、遠くから見たときに、湖面の線と丘の陸線とが重なって見えたために起こった錯覚であると説明をして理解をしようとするのである。

③歴史的解釈では、イエスを神の子であると信じる信仰が、イエスを湖の上を歩かせたのである、と理解する立場である。つまり、ある物語や伝承が誕生するのは、その出来事だけに求めるのではなく、人間の信仰のあり方にも求めようとするものである。本論文では、③歴史的解釈の立場を取るものとする。

また、人間イエスの福祉実践をイエスの誕生から十字架における死、復活、昇天まで描かれている四福音書のイエスの物語は必ずしも事実が書かれているというわけではない。福音書記者たちが「信仰的事実」として書いたものなのである(新井、1976年)。

したがって、四福音書を読む時には、その物語を通して福音書記者たちが当時の人々に対して何を伝えようとしたのかという視点、つまり、意味の受け取り方に目を向けなくてはならない。そのためには、四福音書の構成と内容を知ることが大切になってくる。

3. 四福音書の構成と内容

(1) マタイによる福音書

マルコによる福音書とイエスの語録資料(ドイツ語の資料を意味するQuelleの頭文字を取り「Q資料」と呼ぶ)、さらに、マタイ独自の資料(マタイ特殊資料)を用いて編集された文書であると考えられている(「二資料仮説」)。マタイによる福音書は、旧約聖書の引用が一番多く、イエスが旧約聖書の完成者であること、また、イエスがユダヤ民族だけの救い主としてだけでなく、ユダヤ民族以外の異邦人に対しても救いを与えるというキリスト教の普遍性も意図して描かれている。イエスの宣教を大きな5つ(5章～7章、10章、13章、18章、23章～25章)のブロックにまとめて配置し、イエスの教えを重視している。他方で、冒頭に生誕物語、末尾にイエスの復活顕現物語を付加し、マルコによる福音書では唐突に登場し中途半端に終わっているように見えるイエスの生涯を補完している(上村・2011)。

(2) マルコによる福音書

4福音書のうち最も古いのがマルコによる福音書である。マルコによる福音書は、イエス＝キリストが伝えた事と、イエスがキリストであるとはいかなることであるかについてマルコが信じていることを物語っていく(上村、2011年)。

マルコとその教会とは、ユダヤ教徒と異邦人の両方から憎悪を浴びせられていた。マルコの中心思想は、イエスは「神の子」であることを告白し、宣言することである。

マルコはイエスの地上での生涯と教えを物語ながら、十字架の死に至るイエスの生全体を「福音」として示した。弱くされ苦しむ人々に解放をもたらし、人間として生きていけるという救いと希望を現実化し、それによって当時の社会体制そのものを撃ったイエスの生き様を語ったのである(山口、2005)。

(3) ルカによる福音書

ルカはマタイと同じように、マルコによる福音書とイエスの語録資料(Q資料)、さらにルカ独

自の資料（ルカ特殊資料）を用いて編集された文書であると考えられている。ルカは神の救いの歴史という観点から、イエス登場以前をイスラエル（律法と預言者の時）、神の国宣教（キリストの時）、イエスの死後を終末までの（教会の時）に大きく3つに分けて書いている。

ルカによる福音書は、「罪人」や「貧しい者」、また社会から見捨てられた人々への愛が強調されている。同時に、多くの女性たちが登場することに気付く。ルカによる福音書を「貧しい者への福音書」、「女性たちの福音書」と呼ぶ学者もいる（山口、2005年）。ルカは「悔い改め」を強調する。ルカの言う「悔い改め」とはキリスト教徒になることだが、それだけでは不十分で、倫理的・道徳的に正しく生きることが求められる。

(4) ヨハネによる福音書

「ヨハネによる福音書」は、共観福音書（マタイ、マルコ、ルカの三書）と比較すると大きく異なる。共観福音書とは異なり、複数の編集の手が入っていると考えられる。また、「ヨハネによる福音書」は、「ロゴス讃歌」と呼ばれる。受肉した言（ロゴス）としてイエスを提示している。「父のふところにいる独り子である神」として神とイエスの父子関係をキリスト論の中心においている。

ヨハネによるは教会共同体によって生み出されたと考えられる。このヨハネ共同体は、ユダヤ教会堂から追い出され、後には共同体内部にグノーシス主義者を抱えて分裂してしまう。こうした内外に抱える対立によってヨハネ文書は一方で「愛」を強調しながら、他方で「ユダヤ人」や「反キリスト」への憎悪に満ちている（上村、2011年）。

4. イエスの生きた時代

4-1. 当時の社会的状況

イエスの活躍した地域は地中海の東側、パレスチナ地方で、当時の呼び方でガリラヤと言われる地域とエルサレムのあるユダヤ地方である。この地域はメソポタミアの文化圏とエジプトの文化圏とを結ぶ場所である。この2つの文化圏間の行き来によって、様々な文明や文化が豊かにあり、商業や産業が栄え、経済的な利益を受けることもあった。しかし、同時にこの2つの文化圏が敵対関係になると戦場となるような状況にも置かれていた。

歴史的には、アレキサンダー大王が紀元前336年に王位につき、統一された文化圏となり、ギリシャ語が共通語になる。アレキサンダー大王が紀元前323年に死ぬとその領土は4人の将軍によって分割され、パレスチナはエジプトのプトレマイオス王朝によって支配され（紀元前301～198年）、さらに、シリアのセレウコス王朝（紀元前198～163年）に支配される。

セレウコス王朝は極端なギリシャ化政策を行い、パレスチナのユダヤ人たちは大きな試練の中に置かれ、紀元前167年にマカバイ独立戦争が起こる。紀元前164年にエルサレム神殿を奪い返し、その後、「ハスモン王朝」（紀元前



図表1. キリスト時代のパレスチナ
（資料）『聖書地図』日本聖書協会、1956年

134～37年)が誕生し、ローマ帝国が登場するまでユダヤ独立国家として歩むことになる。

しかし、紀元前63年になるとその独立が破られ、ローマのポンペイウスがエルサレムを占領し、ローマ帝国、ローマ時代が始まることになる。そのローマ支配は紀元前63年から紀元後135年まで続くようになり、ローマの属領となっていたパレスチナで政治的支配権を握っていたのがヘロデであった。ヘロデはマカベヤ王朝末期のユダヤの内戦を利用し、ローマに取り入り、紀元前40年にユダヤ王の称号を与えられ、紀元前37年にはエルサレムを奪回し、パレスチナ全土を平定する。それから紀元前4年に死ぬまで、彼は独裁者として君臨するようになる。

ローマはユダヤ人に大幅な自治を許し、またユダヤ人がその「風習」に従って生きることを認めた。具体的には、軍事権と徴税権、「議会」(サンヘドリン)の召集権と最高裁判権を握っていた。サンヘドリンはユダヤ人の祭司、聖書学者、土地貴族から構成され、宗教問題についても、立法・司法・行政に関しても最高機関であり、民事・刑事の裁判権を持っていた。しかし、死刑執行は総督の許可を必要とした(八木、1968年)。

ヘロデは、ギリシヤ・ローマ風の諸都市を建設し、水道設備や文化施設を作り、各地に要塞を築くなど、さかんに建設事業を行った。首都エルサレムでは宮殿を造営し、神殿を壮麗に立て直す工事をした。しかし、ユダヤ人たちはこの半ユダヤ人(ヘロデはユダヤ教に改宗していた)の君主に対して反抗した。ヘロデは強力な警察国家を作り、反抗する者を次々に捕えては厳罰に処した。民衆は重税に苦しみ、貧富の差が激しくなり、物乞いがあふれるようになった。誰もが本当の救済を求めている。しかし、宗教界は一般民衆を教える状態にはなかった。指導者たちは派閥を組み、民衆から遊離していた。ユダヤ教は過去数世紀の伝統にしがみつき、律法遵守を唱えることと、儀式を執行することに終始するだけだった。

4-2. 当時の宗教的状况

(サドカイ派)

サドカイ派は、少数派だが指導的立場にあった。主要メンバーの大半をエルサレムの貴族が占め、祭司階級の出身で教養の高い人々であった。彼らの中から祭司長が選ばれ、エルサレム神殿を基盤に活動していた。また、神殿国家体制を敷くために最高法院の運営に力を入れ、議会の議長も多かった。思想的には、保守だが、政治的色彩が強いため、外国思想には寛容だった。宗教的にはモーセの古い書かれた成文律法だけを認めて、新しい口伝律法は認めないので、天使やサタンや復活などの新しい思想は認めていなかった。

(パリサイ派)

パリサイ派の多くは下級祭司であり、農民出身者だったと考えられる。彼らは都市だけでなく、ユダヤやガリラヤの村々に住み、農民・職人として働き、年に1, 2か月間エルサレム神殿の職務を果たした(山口、2005年)。民衆の指導者を自任し、律法に極端に忠実なグループだった。彼らは書かれた律法(成文律法)ばかりでなく口で伝えられた律法(口伝律法)も認めるので、復活や天使や霊の信仰など新しい思想も受け入れていた。外国文化には反対をし、イスラエルの復興を願っていた。ユダヤ人社会では最も影響力の強い、大きな団体であった。

(エッセネ派)

エッセネ派という隠遁者グループがあった。荒野で共同体を作り、自給自足・財産共有の修道院的生活をし、「義の教師」と呼ばれる指導者のもとで、水浴(洗礼)で身を清め、菜食し、安息日

を厳守していた。思想的にはパリサイ的な律法を固く守っていた。靈魂の不滅を信じたが、肉体の復活は信じていなかった。1947年に死海の近くのクムランで発見された「死海文書」は、この派の修道院の1つが使っていた諸文書と思われ、当時の貴重な資料となっている。

一般のユダヤ人は宗教を尊重してはいたが、そんなに熱心ではなかった。特に生活に追われている下層の人々は、厳しい細かい律法を守る余裕がなかった。パリサイ人は、庶民の律法や儀式への無関心を責め、軽蔑をしていた。会堂へ来ない、律法を守らない人々は神の救いから外された者であるとの考え方があった。

5. イエスの誕生・洗礼・宣教

5-1. イエスの誕生

イエスの誕生は、マタイによる福音書(1章18節～2章23節)とルカによる福音書(1章5節～2章21節)に描かれている。そして、マルコによる福音書とヨハネによる福音書にはイエスの誕生についての物語はない。このことは何を意味しているのか?そして、イエスの誕生が描かれているマタイによる福音書とルカによる福音書ではその内容にかなりの違いが見られることが分かる(図表2参照)。

このイエスの誕生には大きくいって2つの特徴があると考えられる(松永、1989年)。第1に、イエスがかつてイスラエルにおいて最も偉大であったといわれるダビデ王の子孫であるということ、第2の強調点として、イエスは父ヨセフと母マリアの子として生まれたが、イエス誕生の背後に決定的に働いているのは神の意志、神の計画、神の力であるということ、である(二重線、著者)。

(図表2)「マタイによる福音書」と「ルカによる福音書」のイエスの誕生物語の比較

18 イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。19 夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。」21 マリアは男の子を生む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」と言う意味である。

(マタイによる福音書1章18節～23節)

8 その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9 すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10 天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12 あなたがたは、布にくるまって飼料桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」13 すると、突然、この天使に天の大軍が加わり神を賛美して言った。14 「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」15 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、バツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。

(ルカによる福音書2章8節～15節)

これらのことを考える時に、歴史上の人間イエスに関する事実としては、イエスは父ヨセフ、母マリアの子供として、おそらくヘロデ王治世（紀元前37～4年）の末期に、ガリラヤの町ナザレに生まれたということである。そして、イエスが生まれたガリラヤは、農村社会であり、そこに生きる90%以上を占める農民は、小麦・大麦・オリーブと油、葡萄や葡萄酒、様々な野菜を作っていた。平均5.6名の家族であり、収穫のほとんどは、ローマ帝国、神殿国家体制、ヘロデ・アンティパスによる三重の支配と徴税のために取り立てられていた（山口、2005年）。

父ヨセフの職業については、マルコによる福音書（6：3）で、「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」と書かれている（マタイによる福音書13：55では、「大工の息子」となっている）。当時は、職人の父親の職業を息子が継ぐのは常識であると考えられることから、イエスの父親ヨセフの職業は大工であり、イエスも幼い頃からその仕事を手伝いながら大工を職業にしていたと思われる。

イエスの家庭環境については、イエスが大工という職人階級に属してことから、貧農と「賤民」あるいは「非民」との間の、危険な境遇に押し込められていたとする説（J・クロッサン、1998年）や「どちらかと言えば、むしろある程度豊かな家庭をイメージしておいた方がよさそうである。地場産業をとりしきっていた地方の旧家や資産家とでも言えようか。」（瀧澤、2006年）、とする説まであるが、前述したように、イエスの育ったガリラヤ地方そのものが農村社会であり、その多くの人々が当時の三重の支配と徴税に苦しんでいたことを考えるとイエスの育った環境も同様に苦しいものであったと考えることができる。

5-2. イエスの洗礼

イエスは、大工の子として成長した。ヤコブ、ヨセフ、ユダ、シモン、という4人の兄弟と、何人かの姉妹と共に生活をしていた。大工であった父ヨセフは早く世を去ったらしく、イエスも大工の家業を継いでいたと考えられる。そして、イエスが30歳の頃、おそらく紀元20年代の後半頃にナザレを出てヨルダン川に行き、そこで洗礼者ヨハネからバプテスマ（洗礼）を受けている。

しかし、イエスが洗礼を受けた場面を良く見てみると、マルコによる福音書では、「イエスはヨハネより洗礼を受けられた」となっているが、マタイによる福音書では、洗礼者ヨハネをイエスよりも下位に置こうとしている。そして、ルカによる福音書ではイエスが誰から洗礼を受けたのかについて書かれていない。

このことは、史実として、イエスがヨハネから洗礼を受けたということを表している。そして、たとえ短期間であったとしても、ヨハネの思想的影響下にイエスが置かれていたと考えることができる。しかし、これらのことは、ヨハネ教団と競合関係にあったキリスト教団にとっては不利な事柄であったといえる（荒井、1974年）。



図表3. イエスの洗礼
ピエロ・デッラ・フランチェスカ
キリストの洗礼 1448

(図表3) 洗礼者ヨハネの宣教

9そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼（バプテスマ）を受けられた。

(マルコによる福音書1章9節)

14ところが、ヨハネはそれを思いとどませようとして言った。「わたしこそ、あなたから洗礼（バプテスマ）を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」15しかし、イエスはお答えになった。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。

(マタイによる福音書3章14、15節)

21民衆が皆洗礼（バプテスマ）を受け、イエスも洗礼（バプテスマ）を受けて祈っておられると、天が開け、

(ルカによる福音書3章21節)

それでは、イエスの思想や行動に影響を与えたと考えられる洗礼者ヨハネと言う人物は、どのような人物であったのか。洗礼者ヨハネの行っていた洗礼について見てみるといくつかのことがわかることができる。

(図表4) イエスの洗礼場面

4洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼（バプテスマ）を宣べ伝えた。

(マルコによる福音書1章4節)

4ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。

(マタイによる福音書3章4節)

7それで、ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。8それならそれで、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』などと心の中で言い始めてはいけません。よく言うておくが、神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことができになるのです。9斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。』

(ルカによる福音書3章7節～9節)

ヨハネの宣教の主な特徴としては、以下のことを考えることができる（山口、2005年）。

- ① 世の終わりが近づき神による厳しい裁きをもたらされる。
- ② 自分の後に「より優れた方」が来る。
- ③ 裁きの時に滅びからまぬかれるために、悔い改めと罪のゆるしの洗礼をうけなければならない。
- ④ 悔い改めにふさわしい実を結ぶ生活をする。

しかし、②については、前述したように後のキリスト教団によってイエスの優位性を示すために書かれたものと考えられる。

つまり、ヨハネは、人々に対して、世の終わり（「歴史の終わりの時」「終末の時」）が近いとして、神が世に来て人々を裁く前に自分の罪を悔い改めて神の国に入れるようにと説教をしていた。

そして、その悔い改めのしるしとしてヨルダン川でバプテスマを授けていたのである。また、ヨハネ自身は、(マタイ3:4)にもあるように、禁欲的な生活をしていたと考えられ、「荒野」つまり、ヨルダン溪谷の東側の荒野地帯を活動の場としていたと思われる。彼の語る厳しい裁きは、ユダヤ・ローマの権力者たちにも向けられていたので、権力者たちに苦しめられた弱い、貧しい人々から賞賛されたと考えることができる。

5-3. イエスの宣教

① イエスとヨハネの「神の国運動」の違い

そのヨハネが投獄されると、イエスは宣教活動を開始する。イエスの宣教活動は、ある意味で洗礼者ヨハネの行った「神の国運動」を継続したともいえる。しかし、ただヨハネの行っていた「神の国運動」というものをそのまま継続するのではなく、イエス独自の思想に基づく「神の国運動」を展開していったといえる。

その1つは、ヨハネが行なった「神の国運動」は、「裁き」が中心であったことに対して、イエスの行った「神の国運動」は、「赦し」が中心であったと考えられる。つまり、ヨハネの行った「神の国運動」では、人間を「義人」と「罪人」という2種類の人間に分ける二元論的思考に基づくものであったといえる(上村、2011年)。

それに対して、イエスは、ヨハネの二元論的思考を否定し、「義人」も「罪人」もいない立場をとる。ヨハネの「神の国運動」は、悔い改めて、よい実を結ぶことのできる、ヨハネのいう「義人」として歩むことのできる人々にとっては救いとなり得るが、そのように生きることのできない社会の最下層・最底辺の人々にとっては、ヨハネの言葉は恐ろしい「裁き」の言葉そのものであったに違いない。

イエスは、そのことに気付くのである。そして、どのような人も神に愛されている者として、生きていけるということを示すために、社会の最下層・最底辺の一人ひとりの心と体を癒していくという実践活動を展開していくことになる。イエスはヨハネから洗礼を受けたヨハネの弟子であったが、ヨハネの道を継承しつつもヨハネから独立し独自の「神の国運動」を展開していったのである。

そのことは、ヨハネが荒野に留まっている限り、彼からさえ社会的に遮断されていた人々はヨハネのもとに行くことができなかったのに対して、イエスはむしろ、この人々のもとに自ら出て行ったのである(荒井、1974年)。このことからイエスの「神の国運動」はヨハネの「神の国運動」の違いを見ることができる。

それを一言でいうと「神の国の到来を告げ知らせる」ということになる。イエス自身はヨハネのように「悔い改める」ことも「洗礼を受ける」ことも求めなかったと考えられる。そして、「神の国」とはどんな所であるのかということ自身を自身の活動を通して世の人々に示していくのである。

② イエスの祈り(主の祈り)

イエスが弟子たちに教えたものとして、「主の祈り」がある。これは、現在でも世界中のキリスト教会で祈られている。しかし、イエスがこの祈りを弟子たちに教えた背景には、当時のユダヤ教社会全体の様相に対して、またそこでなされている実際の祈りに対して、皮肉に、批判的に、言葉を投げつけているのである。それは皮肉な批判でありながら、同時に生活する者の叫び声でもあった(田川、2004年)。

9だから、こう祈りなさい。『天におられるわたしたちの父よ。御名が崇められますように。10御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも。11わたしたちに必要な糧を今日与えてください。12わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。13わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。』

(マタイによる福音書6章9節～13節)

2そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。3わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。4わたしたちの罪を赦してください。わたしたちも自分に負い目のある人を皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』」

(ルカによる福音書11章2節～4節)

瀧澤は、ルカ11：2-4とマタイ6：9-13の「主の祈り」を以下のように訳している（瀧澤、2006）。

「お父さん、
あなたの名が崇められますように。
あなたの国が来ますように。
わたしたちに必要なパンを今日も与えてください。
わたしたちの借金を免除してください。
わたしたちも自分に借金のある人を免除しますから。
わたしたちを試練に遭わせず、悪人どもから救って下さい。」

ここで言う「お父さん」とは、日常生活のアラム語の俗語で「お父さん」という「アッパー」が使われている。神に対するイエスの親密な関係をあらわしているとも言えるが、当時としては、聖なる神を俗語で「お父さん」と呼ぶことに対して非常識であったと考えることができる。

さらに、「わたしたちに必要なパンを今日も与えて下さい」、「私たちの借金を免除してください。」と祈る時にはそのことは決定的になる。なぜなら、神に対して「パンを与えて下さい」、「借金を免除してください。」と祈ることはあまりにも世俗的すぎるといのである。恐らく、現在でもキリスト教会でこのような祈りをしたとするならば、「キリスト教は、ご利益宗教ではない。」という批判が一部からは上がるかも知れない。

そこで、新共同訳聖書のマタイによる福音書では、「パン」を「糧（かて）」と訳し、「借金を免除してください」を「負い目を赦してください」と訳し、ルカによる福音書では、「罪の赦し」を「借金」に代えて使っている。ここから分かることは、イエスが教えた「主の祈り」は、かなり具体的・実際的な祈りであったことが分かる。

③ イエスの説教（山上の説教）

イエスは多くの人々に対して、説教を行った。福音書にはイエスが語った話が多く出ている。そのうちのいくつかを見ていくことでイエスの宣教活動の本質が見えてくる。ここでは、イエスの教

えの中でも最も有名な説教であり、黄金律（ゴールデンルール）とも言われる「山上の説教」について見ていくことにする。

3心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

4悲しむ人々は、幸いである。その人たちは慰められる。

5柔らかな人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。

6義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。

7憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。

8心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。

9平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。

10義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

11わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。

12喜ばなさい、大いに喜ばなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。

（マタイによる福音書5章3節～12節）

また、この箇所は、ルカによる福音書にもある。しかし、マタイによる福音書とルカによる福音書にはいくつかの違いが見られる。マタイによる福音書では、この説教を「イエスはこの群衆を見て、山に登られた。」（5章1節）とあるのに対して、ルカによる福音書では、「イエスは彼らと一緒に山から下りて、平らな所にお立ちになった。」（6章17節）とあるように、マタイによる福音書では説教を語った場所が「山上」であるが、ルカによる福音書では「山から下りて」語っている。

さらに、マタイによる福音書では、「心の貧しい人々」、「天の国」が、ルカによる福音書では「貧しい人々」、「神の国」となっていたりする。このような違いは見て取れるが、両福音書とも共通の資料（Q資料）を用いていることが考えられる。そして、ルカによる福音書の方にQ資料の元の形が反映しているといえる（荒井、1994年）。

例えば、マタイによる福音書に見られる「(心の) 貧しい人々」(5:3)、「(義に) 飢え渴く人々」(5:6) という表現を見るときに、マタイは宗教的意味での貧しさ、心理的意味での貧しさ、あるいは、神と人との正しい関係性を意味している表現を意図的に使っていることになる。

そして、「神の国」を「天の国」と書き換えた事については、マタイには旧約聖書の戒律に極めて忠実であり、神がイスラエル民族に与えたという「十戒」において記されている「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」（出エジプト記20章7節）という文言を厳密に守ろうとしたのである（瀧澤、2006年）。

20 さて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。

「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。

21 今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる。

22 人々に憎まれるとき、また、人の子のために追いつかれ、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである。

23 その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。この人々の先祖も、預言者たちに同じことをしたのである。

24 しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である、あなたがたはもう慰めを受けている。

25 今満腹している人々、あなたがたは不幸である、あなたがたは飢えるようになる。今笑っている人々は不幸である、あなたがたは泣くようになる。

26 すべての人にほめられるとき、あなたがたは不幸である。この人々の先祖も、偽預言者たちに同じことをしたのである。

(ルカによる福音書6章20節～26節)

一方、ルカによる福音書では、「貧しい人々」、「今飢えている人々」、「今泣いている人々」という表現を見るときに、マタイとは異なり、社会的・経済的貧しさの意味に受け取ることができる。それでは、なぜ、人々は「貧しい」「今飢えている」「今泣いている」状況にいるのか？それは、当時のローマ帝国の一属州のユダヤにとって、自治機関の宗教的・経済的中核はエルサレム神殿であり、宗教的・政治的・法的中核は「サンヘドリン」と呼ばれる最高法院であったのである。

そして、このような神殿勢力と最高法院の議員がユダヤ自治機構の三権（司法・立法・行政）を独占し、一般民衆に対する差別構造を、彼らの宗教的代弁者（主としてラビたち）によって正当化をしていたのである（荒井、1994年）。また、「山上の説教」の資料となった「Q資料」に出てくるギリシア語の「プトコス」を「貧しい」と訳すことには大きな問題がある。「貧しい」という意味のギリシア語は「ペネース」であり、「プトコス」は「貧窮した」（衣食に事欠くほど貧しい）と言う意味なのである（クロッサン、1998年）

つまり、イエスは、当時のユダヤの社会状況の中で、生活に困窮し、様々な社会的差別の中で神の律法を守ることができない人々に対して、「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである」と説教したのである。そして、イエスが語ったこれらの言葉の中には、そのような現実を生きていかざるをえない人々に対する愛がみなぎっていることが分かる。そして、イエスのいう「神の国」は、その後の彼の説教と行動を伴う宣教活動の中でより一層明らかにされていくのである。

6. おわりに

本論文では、聖書における人間イエスに見ることのできる福祉実践と思われる活動について取り上げ、それが現在の私たちに対してどのようなメッセージとなっているのかを考察することにある。今回はその(1)として、イエスの誕生・洗礼・宣教について見てきたが、特に宣教において今回は、イエスの行った「神の国運動」、「祈り」、「説教」について取り上げた。

イエスの誕生については、特にイエスの生まれたガリラヤ地方に注目することが重要であると考える。本論文でも触れたように、当時、ガリラヤは農村社会であり、収穫のほとんどは、ローマ帝国、神殿国家体制、ヘロデ・アンティパスによる三重の支配と徴税のために取り立てられていた状況を見た。イエスはその中で生まれ、30歳近くまで過ごすのである。イエスは、そこで何を見、何を考えたのか、そして、そのことがイエスを洗礼者ヨハネのもとに行かせ、洗礼を受けることになったのである

イエスは、ヨハネの弟子として、ヨハネの影響下でしばらく活動をしたのは明らかである。しかし、ヨハネの宣教は、人々に対して世の終わりを告げ、神が世に来て人々を裁く前に自分の罪を悔い改めて神の国に入ることを求める。その悔い改めのしるしとして「洗礼」を受けさせるのである。ヨハネの死後、イエスは活動を開始する。イエスはヨハネの「神の国運動」を継続しつつもイエス独自の宣教活動を展開する。それは、どのような人も神に愛されている者として生きていけるということを彼の行う「神の国運動」、彼の教える「祈り」、そして、彼の語る「説教」の中で示すことであった。そのことを通して見えてくることは、「人間イエス」は、当時の国家権力に対して徹底的に反逆を試みた人間であったということである（田川、2004年）。そして、そのようなイエスの視点というものは、当時の社会の中において最も「神の国」に最も遠い存在と考えられていた人々の立場に立つものであった。

そこには、本来、人間を幸せにするための国家制度や宗教制度というものがあるが実際には、人間を「義人」と「罪人」に分けてしまい、「義人」とされた人々が「罪人」とされた人々を裁くというシステムに対するイエスの怒りの行動であったということもできる。そのことは次回以降で取り上げるイエスが宣教活動の中でどのような人々と、どのような交流を図り、そして、当時の宗教制度、社会制度に対するイエスの宣教活動をより細かく見ていくことで一層明らかにされていくことになる。

引用・参考文献

著書

1. 赤司道雄、『聖書 これをいかに読むか』、中央公論社、1966年
2. 新井智、『聖書 その歴史的事実』、日本放送出版協会、1976年
3. 荒井献、『イエスとその時代』、岩波書店、1974年
4. 荒井献、『問いかけるイエス 福音書をどう読み解くか』、日本放送出版協会、1994年
5. 上村静、『旧約聖書と新約聖書－「聖書」とはなにか』、新教出版社、2011年
6. 大貫隆、『イエスという経験』、岩波書店、2003年
7. 久米博、『キリスト教 その思想と歴史』、新曜社、1993年
8. 久山道彦・泉守彦・吉岡良昌、『考えながら学ぶキリスト教』、川島書店、2000年
9. ジョン・ドミニク・クロッサン、『イエス あるユダヤ人貧農の革命的生涯』、新教出版社、1998年
10. 田川健三、『イエスという男』、作品社、2004年
11. 滝澤武人、『イエスの現場』、世界思想社、2006年
12. 松永希久夫、『歴史の中のイエス像』、日本放送出版協会、1989年
13. 八木誠一、『イエス』、清水書院、1968年

14. 山口雅弘、『よくわかる新約聖書の世界と歴史』、日本キリスト教団出版局、2005年

論文

1. 金相圭、「イエス・キリストの医療福祉的行蹟」、『川崎医療福祉学会誌』 Vol.2 No.1、1992年
2. 島田裕子、「癒しの思想－マルコ福音書のイエスの癒しにみられる人格的癒し－」、『キリスト教社会福祉学研究』 第46号、日本キリスト教社会福祉学会、2013年
3. 春名苗、「福音書における女性－旧約聖書時代の女性の地位とイエスの女性への関わり－」、『キリスト教社会福祉学研究』 第41号、日本キリスト教社会福祉学会、2008年